# ガーデニングサポーター養成講座

## ベランダガーデニング入門　6月

# ベランダガーデニングの特徴

- 植木鉢で植物を育てること
- 苗を手に入れよう
- 苗の選び方（統計で選ぶ）
- 苗の選び方（気候で選ぶ）
- 日当たりと温度を控えておく
- 用土について
- 肥料について
- 土壌の塩基
- 有機物について
- 堆肥について
- 農薬等
- ハーブについて
- 株分けについて
- 水やりについて

# 植木鉢で植物を育てること

植物の根はおよそ3種類あります。左のひげ根は、シダや単子葉植物など一般の草本が多いです。

真ん中の枝状の根は木本が多いです。右のゴボウ根は、タンポポなどの植物がありますが、小さな草花であっても根は1メートルもの深さに達します。

植木鉢の中では、多くの植物が不自然な姿で大切な根を成長させて行くことになります。

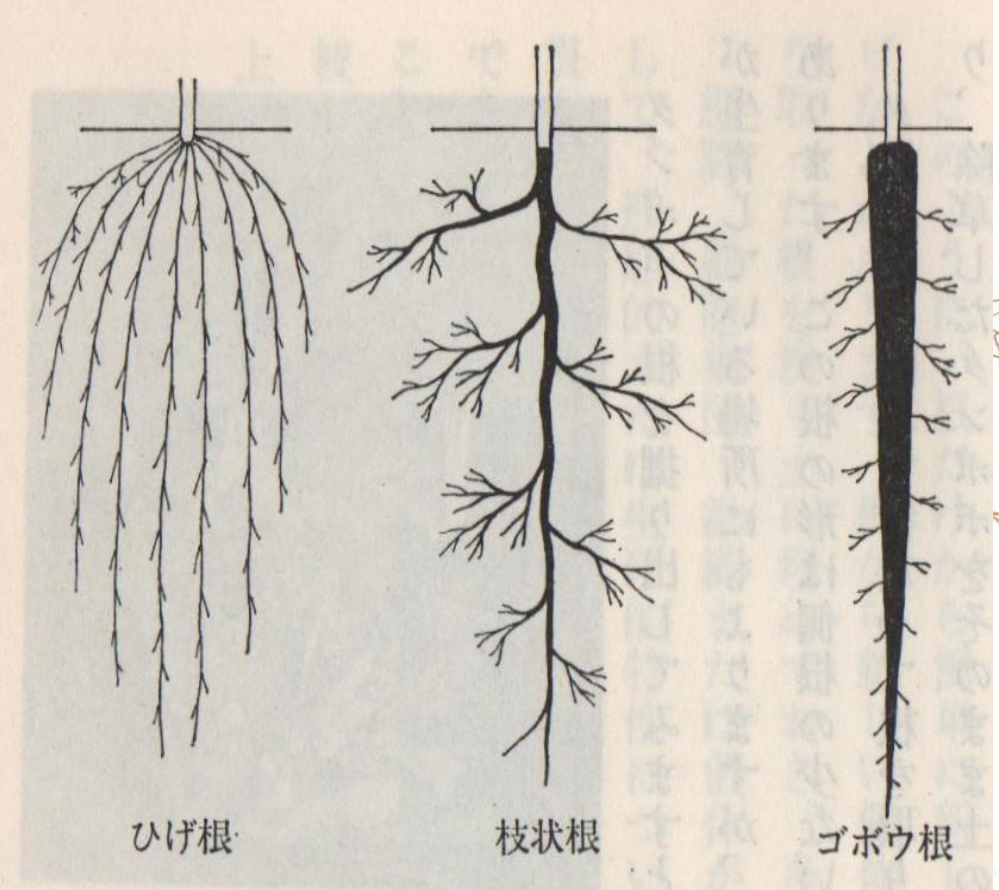



図 3・19　根の模式図

# 苗を手に入れよう

ポリポットに入った市販の苗は、手に入れたら速やかに鉢に植え替えましょう。最初から大きな鉢に植えずに、一回り大きいくらいの鉢で、植えてある用土と出来るだけ似た用土で植えてください。その際根がポットの中で一杯になっていたら、底の方を崩すとともに、箸などで上から突いてその穴に新しい用土を入れてください。どのくらい元の土を落とすかは、苗の状態、植物と季節によって異なります。
根を日光や風に当てて乾燥させてはいけません。

ポットから取り出したら直ぐに植えられるように十分に準備してから植え付けましょう。

# 苗の選び方（統計で選ぶ）

| 検索結果／品目別取扱実績（苗物） | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （単位：箱・円） | | | | | | | | | | | | |
| 品目（小分類） | 2022.04 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 2023.1 | 2 | 3 |
| サルビア | 4712 | 14665 | 12956 | 3621 | 1403 | 2678 | 1861 | 387 | 110 | 112 | 156 | 704 |
| 日々草 | 5017 | 25803 | 31795 | 19440 | 11290 | 3807 | 151 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| パンジー | 271 | 12 | 0 | 1 | 0 | 2496 | 76820 | 138385 | 68470 | 24413 | 14531 | 7697 |
| ペチュニア | 41235 | 31808 | 20165 | 5348 | 1590 | 831 | 367 | 16 | 0 | 12 | 596 | 19601 |
| マリーゴールド | 18408 | 23311 | 19925 | 6883 | 4670 | 6732 | 1581 | 265 | 2 | 0 | 66 | 8432 |

東京都中央卸売市場・市場統計情報(月報・年報)

https://www.shijou-tokei.metro.tokyo.lg.jp/

花き＞類別検索で苗物や花鉢などで検索すれば人気植物の動向が分かります。沢山市場に出回っている頃購入しましょう。但し統計表は、自分で集計しなければなりません。報告書もあります。東京都庁統計課又は総務省統計図書館で閲覧できます。

# 苗の選び方（気候で選ぶ）

右はクライモグラフという気候が一目で分かるグラフです。横軸は湿度で雨量では無いので注意願います。温度と緯度は必ずしも一致いたしません。
気象庁のWEBサイトから世界中の地域の情報を日々手に入れることが出来ますが、作図が面倒なので書籍から引用しました。
苗は出来るだけ気候条件の近い原産地のものを手に入れましょう。特に寒い地方の植物は、日本国内のものであっても育てるのが困難です。

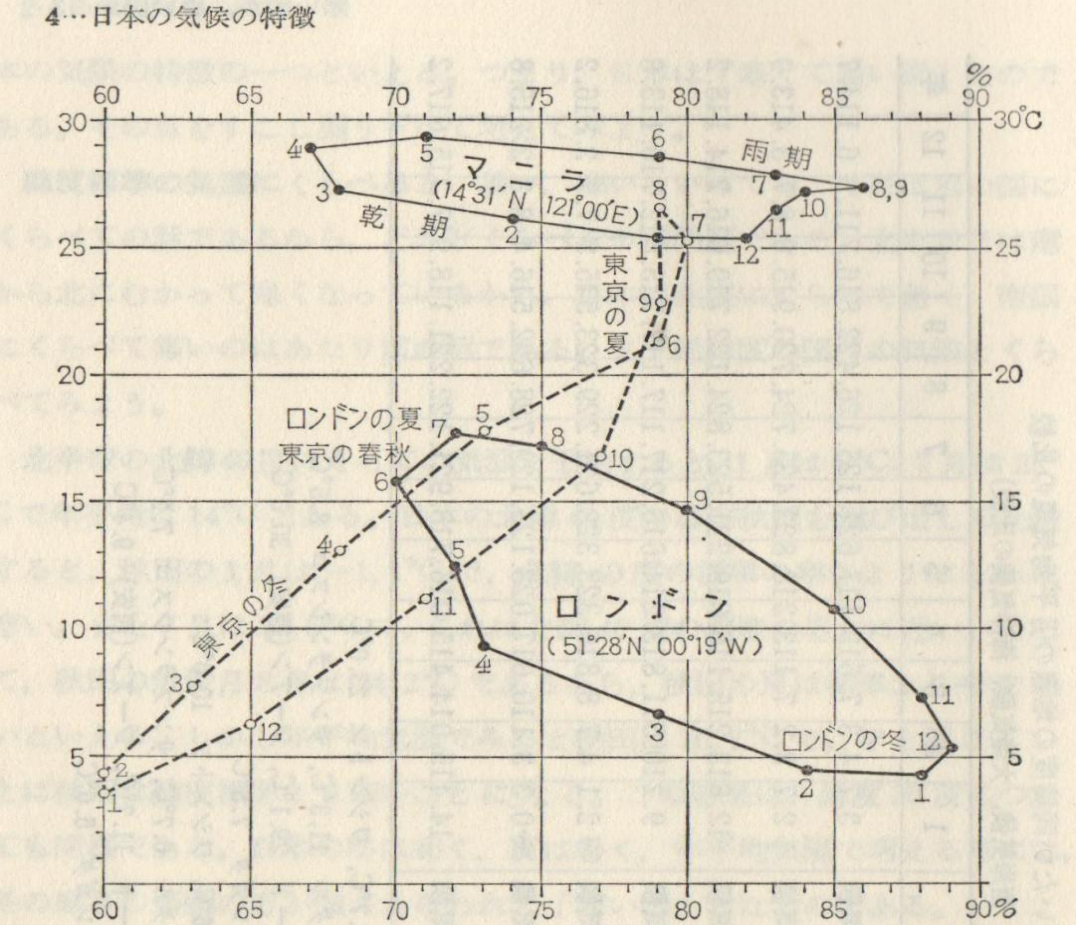
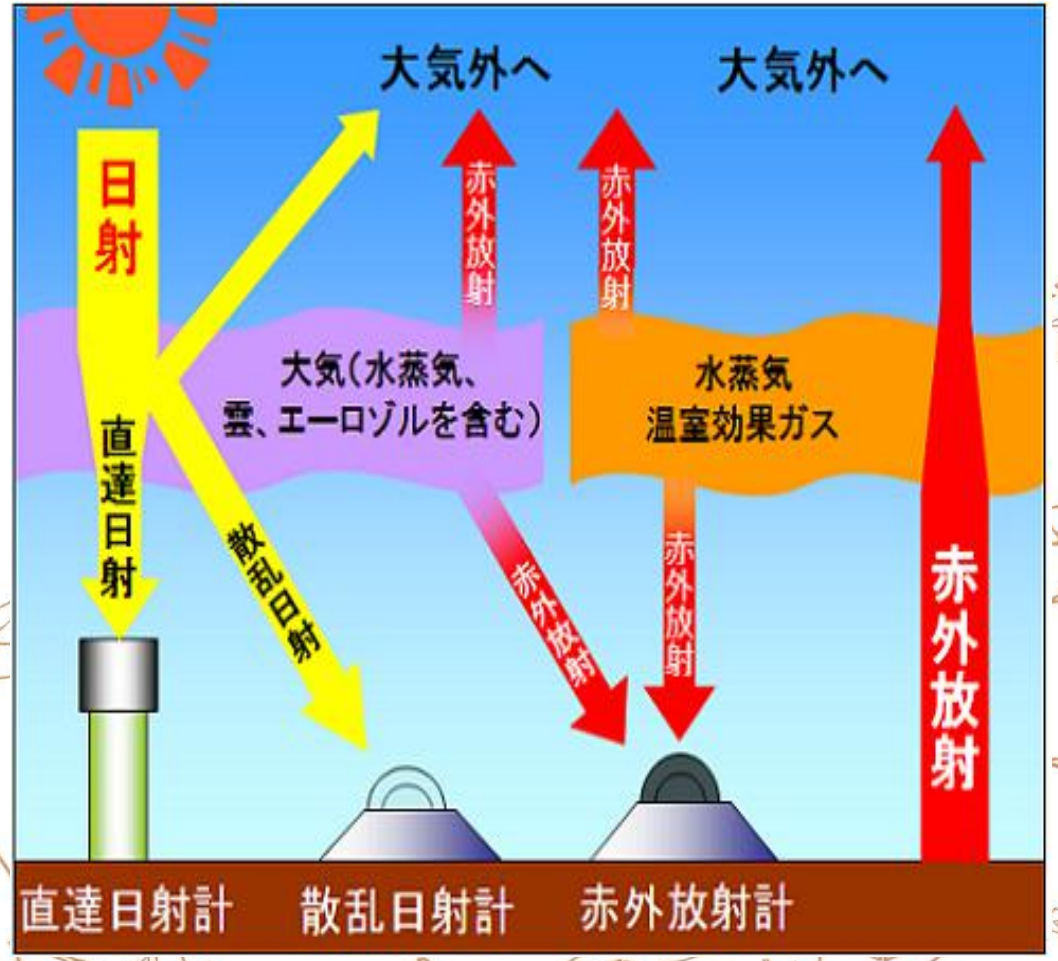


図1　ロンドン，マニラ，東京のクライモグラフ

# 日当たりと温度を控えておく

ベランダの日当たりと温度は、建物の構造と太陽の方角の障害物等が個々に異なるため千差万別ですし、日々変化するものです。

冬至の南中時の太陽高度は31.6°で、夏至の南中時の太陽高度は78.4°です。
植物には、可視光線以外の紫外線と赤外線、反射や輻射も影響します。
各自が自宅のベランダを注意深く観察し、毎日の記録を取っておくのが肝要です。
風通しと輻射や反射については、自分でも対応できることがあります。



# 用土について

市販の調合された培養土を購入する際には、軽い土と重い土があります。水やりの手間をいとわないならば、なるべく水はけのよい軽い土を選んだ方が良いでしょう。なぜなら、水のやりすぎで失敗する例が多いからです。自分で配合するのなら、硬質赤玉土と腐葉土及び山砂又は軽石を適宜混ぜれば大抵の場合大丈夫です。その他、植物によって特殊な用土が必要な場合があり、一冊の本になるほど奥深いものです。

小粒

14L

# 肥料について

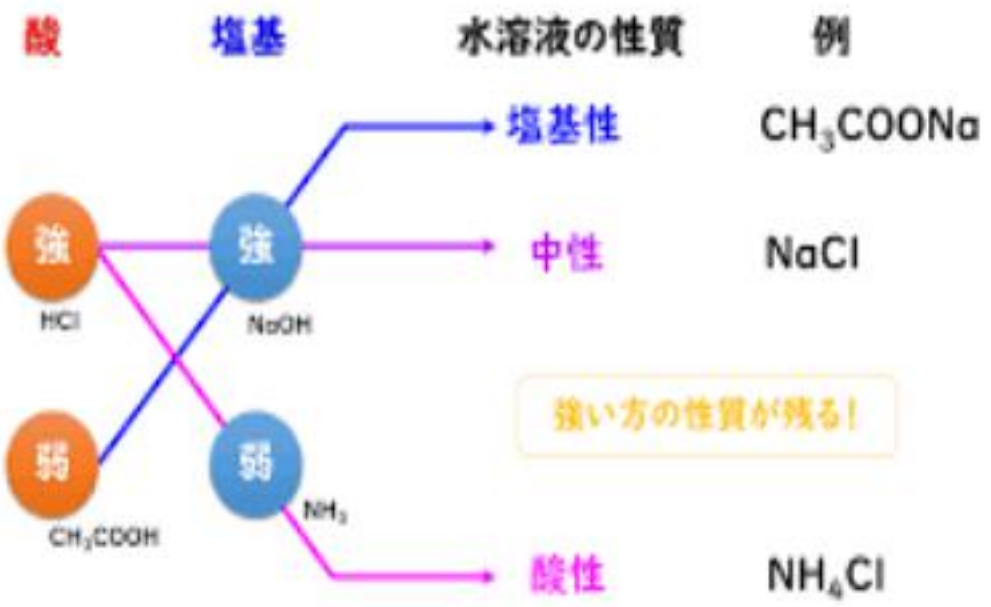
肥料特に重要な成分である三要素とは窒素・リン酸・カリのことをいいます。右の写真は、岩手県農業研究センターによる実験結果です。

養分をほとんど含まない農地の下層土を用いて、窒素、リン酸、カリのすべてを与えた「三要素」区、リン酸とカリのみを与えた「無窒素」区、窒素とカリのみの「無リン酸」区、窒素とリン酸のみの「無カリ」区、すべてを与えない「無肥料」区の5つの条件で、水稲を育てた結果です。リン酸が無いと他が満たされても成長しないのが分かります。

# 土壌の塩基

古い定義では、「酸は、水に溶けると水素イオンH+を生じる物質であり、塩基は、水に溶けると水酸化物イオンOH-を生じる物質である。」とあり、園芸については現在でも通用する考え方です。

強酸の塩酸HClにはH+があり、強アルカリの水酸化ナトリウムNaOHにはOH-があります。両方の水溶液を混ぜると酸のH+をアルカリのOH-が受け入れて塩化ナトリウムNaClと水 H2Oを生成させる中和反応となり、塩水（完全に電離しているため水溶液）となります。いわゆる中性です。
水に溶けた塩基のことをアルカリと呼びます。酸性土の問題が分かりにくいのはこのためなのです。



# 有機物について

以前は、有機物とは生物がつくりだす化学物質であると定義されていました。
物質は生物から得られる「有機物」と鉱物から得られる「無機物」に分けられていたのです。ところが、1828年ドイツの化学者ヴェーラーが、無機物から有機物を合成することに成功しました。人間が有機物を合成できるようになったことで、有機物は生物から得られる特別な物質という意味を失いました。しかし、有機物・無機物という便利な分け方は現在も用いられています。

古来より有機物とされてきた多くの物質は、炭素原子を骨格として様々な原子を結合して形成していることが分かり、現在は炭素を骨格とした化合物のことを有機化合物と呼んでいるのです。そして、それ以外の化合物を無機化合物と呼んでいます。
有機も無機もその作用は変わらない理屈なのですが、実際に生物に対する影響が異なることがあるのが不思議です。

# 堆肥について

堆肥とは稲わらや落ち葉、家畜ふん尿、食品残渣などの有機物を、微生物の力を使って分解させ、成分的に安定化するまで腐熟させたものです。堆肥は、土の中に存在する土壌微生物や作物の根から放出されるクエン酸などの有機酸によって分解・溶解され、作物の根から養分として吸収されます。

微生物や有機酸が分解しきれなかった部分が、腐植として土の中に残ります。しかし腐植は水分や肥料成分を保持するなど、土壌の物理性を良好にする働きがあります。

なお、肥料の袋や箱に掲載されている「N：P：K＝6：10：5」などの表示は、肥料成分量の割合を示す、重量パーセント（%）で、数字が大きいほど、成分が多いことになります。 たとえば、チッ素（N）6%とは、肥料100g中にチッ素成分が6g含まれていることを示しています。化学肥料はこの数字が大きいのですが、有機肥料は小さく、その他残りは堆肥となります。同じ量の肥料であっても、堆肥が多くあるとそのの効果が高いことは既知のものとされております。

# 農薬等

農薬にも化学製品と自然製品があります。化学製品の長所は安価で効き目が強いことです。短所は、前記の塩基や有機物の解説にもあったとおり分解後も土壌に塩が形成されること、耐性が出来ること、他の生物に対する影響が不明であること、将来何が起きるか分からないことです。

自然製品の場合は総てこの逆になります。

なお、物理的な害虫や病気の除去という方法も家庭園芸では可能です。生物を殺傷しないためヴィーガニストなどに人気があるようです。

# ハーブについて

香草のことですが、何等かの薬効のある植物を言います。

人気のあるハーブの多くは、ヨーロッパなどの地中海性気候地帯原産のものが多く、夏に高温多湿、冬に乾燥する日本の気候には本来適していません。
最初は、トウガラシ、バジル、ミョウガ、レモングラス、シソなどから始めれば間違いはありません。

# 株分けについて

ワイルドストロベリーは、野生のイチゴです。

植え替えは、夏を避けたいので6月ではぎりぎりの時期です、更に小分けにするので失敗する可能性が高いです。したがって、植え替えた後で10日ほど直射日光に当てずに、風通しの良い場所で管理をしてください。過湿にならないように注意して水をやりすぎないように願います。

株分けは、手で根をほどくようにまとまった株単位で行います。分けた株は土をかけて風や日光から守ってください。鉢は事前に半分用土を入れて用意しておいてください。

# 水やりについて

植物が好きな方は、水をやりすぎないようにしてください。
また、水やりを忘れて枯らすようであれば、底面潅水や自動潅水装置などありますのでご相談願います。
一般に排水の良い用土で植え付けて、頻繁に酸素を豊富に含んだ水を潅水するのが理想的です。
しかし、水やりが多いと肥料分は皆流れ去ってしまいます。また、流れた肥料は水質汚染の原因ともなります。だからといって、水やりが少なくて済むような用土や鉢に植えると植物の生育を害します。
適切な潅水は、皆さまの個々の環境により千差万別です。いろいろと試して良い水やり法を発見してください。